

復活節第二主日（神のいつくしみの主日）

ヨハネ 20・19-31

2018.4.8

高円寺教会 9:30 ミサ

クラレチアン宣教会 梅崎 うめざき たかいち 隆一神父

ある神学生が聖人と誉れの高い隠遁者のもとを訪れ、自分の今までの人生の中で辛かった時の話をしました。すると、それを聴き終わった隠遁者はこう言ったそうです、「イエスが復活したとき傷跡が残っていたけれども、触られても痛くありませんでした」。そのことばを聞いた神学生は大泣きしたそうです。

今では心の傷のことを心理学用語でトラウマと言うそうですが、人は人生の中で傷を受けることが多々あります。無傷で人生を乗り切れる人は一人もいません。そして傷を負った人は、やがてその傷の痛みを乗り越え、その証言が多くの人に生きる力を与え、他者の傷を癒やします。戦争体験者の証言、あるいは震災で自分の大切な人が亡くなったという辛い話、いじめられて苦しかったときの話、それから自分の心の傷の話をしたらかえって馬鹿にされてさらに傷つけられた体験、また誰にも分かってもらえなかった、人生の中で一人ぼっちになった、自分がやらかしてしまった罪による傷など。このように、人は大きなことでも小さなことでも傷を受けるものです。しかし、その傷は痛みだけでは終わらないということをイエスはわたしたちに教えてくださいます。イエスも人から肉体的にも精神的にも傷つけられました。やがてイエスは復活され弟子たちにその傷を示し、息を吹きかけられました。人は傷つけられてそれで終わりではなく、傷つけられたあなたがたは人を癒すような大きな力を持つことになる。それをイエス・キリストは復活を通してわたしたちに示されました。

「神様がちりで人の形を造り、鼻から息を吹きかけられ、人は生きるものとなった」（創世記2・7）とあります。人は神から息を吹きかけられ生きる者となったのですが、傷つけられることで滅びに向かっていくことがある。しかし傷を負った人が自分の努力ではなく神の助けによって、やがてその傷を示しながら神様と同じように人にいのちの息を与えることができるようになる、と教えてくださいます。

弟子たちが復活の主に出会った後、トマスは自分の傷を抱えたままその場に

やって来ます。弟子たちはトマスにわたしたちは復活の主を見た。そしてその復活の主から息吹を与えられることによって傷ついたわたしたちは癒された。こうしてわたしたちは自分の傷を示せるような者へと変えられた、と証言をします。このような復活証言を聞いたトマスは「そんなことは信じられない。傷跡に触ってみなければ、決して信じない」と主張します。ところが八日の後、トマスも弟子たちと同じ体験をすると、すっかり変えられてしまいます。そして「わたしの主、わたしの神よ」と自分の心からの言葉によって信仰告白をする。

日本の教会は、先輩にあたるヨーロッパの教会に比べたら、トマスのような立場だと言えます。ヨーロッパの人たちが「わたしたちは主を見た」と信仰告白しても、「そんなもん信じられるかい」と思っていた。しかし復活の主に会い「わが主、わが神よ」と信仰告白をする。そのときから日本の中で今までとは違う新しい歴史（救いの歴史）が始まっていく。歴史の中でいろんな傷を負った日本の社会が神のいのちを与えるものへと変えられていく。

わたしたちが八日毎に捧げるミサは、弟子たちと同じように復活の主に出会うために祝っています。ですからわたしたちは弟子たちと同じ体験をしているはずです。わたしたちも日常生活の中で大なり小なり傷を負い、時にはトマスのように「神様なんか信じられるか」と疑念を抱くときもあります。でもこのミサの中においてわたしたちは復活したイエスに出会い、「わが主、わが神よ」というトマスの体験をわたしたちはしています。復活の主に出会った時の信仰告白は心からの自分の言葉で表現できれば大変素晴らしいことです。そんなことを感じたことはないとおっしゃる方もいらっしゃるかもしれませんが、わたしたちは秘跡において主イエス・キリストに確実に出会っています。傷ついたわたしたちが弟子たちと同じように復活した主によって変えられたことを喜びのうちに伝えることを、福音宣教と言います。復活の主に出会うことなく福音宣教をすることができる人は一人もいません。

イエス・キリストは復活した後に弟子たちに現れて、「私はあなたたちを遣わす」とおっしゃいました。わたしたちも、主イエス・キリストに出会うことによって、宣教をするために遣わされる者となりました。まずはわたしたち自身が人生の中で受けた傷をどうやって神様によって癒やされたのか、そしてそれをどのように示すことで人々に大きな力と喜びを与えることができるのかをわたしたち一人ひとりが問われています。

神の息吹を受けたわたしたちは、日常生活の中で働かれる聖霊の業を認め、人々の中にも同じ神の業が働いているのだということを多くの人に伝え、共に同じ喜びを分かち合うことができますよう祈りましょう。